保育者が子どもを見取る視点（Ⅰ）
－活動案や話し合いから－

奥山　優佳

本研究では、子どもを見取ったり、理解しようとしたりする際の視点の持ち方とその特徴について、保育における５領域をもとに明らかにし、子どもを理解するという保育者の専門性向上のための視座を見出すことを目指した。保育参観研修会における保育活動案や、その後に行われた７名の保育者による話し合いから、保育者が子どもを見取る際の視点について保育の５領域のどの部分を意識しているのかを分析した。その結果、ほとんどが領域「健康」や領域「人間関係」に視点があたることが多く、領域「環境」での知的な面への興味関心、領域「言葉」での言葉の美しさや楽しさ、領域「表現」での感性について視点が当たりにくい特徴があることが明らかとなった。子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を培うために、保育者は多面的な視点を持つことを意識して子どもを見取っていくことが必要であるが、そのためには、様々な他者との保育についての意見交流が大切であり、その際に他者の意見に耳を傾ける謙虚な姿勢も大切であること、そして、保育者自身が自分の子どもを見取る際の視点の持ち方の傾向に気付いたり認識したりすることが最も重要であることを示した。

１．問題と目的

⑴　幼児期と児童期の接続

近年、小１プロブレムと呼ばれる小学校就学時の子どもたちの不適応問題が注目され、2005年１月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」においては、幼児教育の大切さが改めて確認されるとともに、幼稚園や保育所等の幼児教育施設と小学校双方の質の向上や、幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れる方策の工夫といった「幼保小連携」

の改善や充実が示された。その後、2008年３月に、幼稚園教育要領と保育所保育指針が改訂（改定）され、小学校との連携を強化する項目が設けられたり、保育所においては、子どもの育ちを支える資料（保育所児童保育要録）作成が義務化になったりなどしている[1]。小学校学習指導要領の改訂においても、第１章総則の第４「指導計画の作成等にあたって配慮すべき事項」の（12）の中に幼稚園や保育所との連携や交流も明記され、また、国語、音楽、図工の各教科における「指導計画の作成と内容の取り扱い」の中で、第１学年においては幼児期の教育との関連を考慮する項目が設けられている[2]。更には、生活科では、生活科を中心とした合科的な指導の工夫について記載されており、幼稚園や保育所での保育内容が、５領域が相互に関連を持ちながら総合的に行われていることを教科学習においても接続していくようにより意識させる内容となっている。2009年には文部科学省と厚生労働省は「保育所や幼稚園と小学校における連携事例集」を作成し、都道府県や市町村関係部局に周知が図られたり、2010年には文部科学省が「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力会議」を設置して2011年11月にはその報告書が発表されたりなど、国として、幼児教育と小学校教育との円滑な接続という視点で小１プロブレムに対する対策がなされてきた。中でも、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力会議では、幼児期と児童期のつながりの時期を接続期とし、その接続期におけるそれぞれの教育課程編成や指導計画作成にはつながりを持たせ、児童期の接続期におけるスタートカリキュラム作成とその実施の重要性を報告書で述べている[3]。これを受けて、各都道府県や各市町村では、教育委員会を中心に独自のスタートカリキュラムを編成し、実施しているところも少なくない。山形県においても、山形県教育庁義務教育課が中心となって、2009年より幼保小連携スタートプログラム作成委員会が発足し、2010年11月に「幼保小連携スタートプログラム　～「遊び」から「学び」へ　共に育む自主性と思いやり～」を作成した[4]。2011年度から2012年度にかけては、そのプロブラムの理念の周知と実際の連携の実施を図るために、県の義務教育課は推進事業として各地区の教育事務所を通じて自主的に推進しようとする市町村の教育委員会へアドバイザーを派遣し、幼保小連携のための研修会を行っている。

⑵　「子どもを理解する」保育者の専門性

筆者は、このスタートプログラムの作成委員ということもあり、アドバイザーとして推進事業の行われた２年間に６市町の研修会に赴く機会があった。１年目はこのプログラムの理念理解の研修が多く、幼児教育の基本や内容の理解、実際の保育の展開の理解、子どもの見取り方と理解の仕方について等の内容がほとんどであった。それらは、幼児教育と小学校教育の違いのために生じたことであり、そのことについてお互いに理解し合う機会もほとんどなかったためであろう。山形県では、保育者には、子どもの内面を読み取る「透しの目」、子どもの良さを引き出す「感性の目」、子どもを多角的、継続的に見続ける「プロセスの目」、これで良いのかと振り返る「内省の目」の４つの目で子どもを見取ることが重要であるとし、それを児童期の接続期にもつないでいこうという意図がある。特に、子どもの表情、仕草、言動などから内面の気持ちを読み取る（山形県の場合「透しの目」と位置づけている）保育者の専門性については、今回の推進事業の研修により、具体的な保育や授業の参観を通してようやく小学校側に理解されてきている状況にある。

⑶　発達を見取る保育者の視点

幼児期の子どもを理解するためには、その内面の気持ちの理解だけではなく、発達の過程について見取る専門性も保育者には要求される。幼稚園教育要領や保育所保育指針において、保育のねらいと内容は、心身の健康に関する領域「健康」・人とのかかわりに関する領域「人間関係」・身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」・言葉の獲得に関する領域「言葉」・感性と表現に関する領域「表現」の５つの領域からなり、その領域に関しては、幼稚園教育要領解説では「発達の側面からまとめたもの」と述べ、保育所保育指針解説書では「子どもの発達をとらえる視点」と述べている。安藤は「領域は、幼児の発達を捉える際の側面で、育ちを見る視点、あるいは保育者が指導を行う視点」と言っている[5]。また、平成元年の幼稚園教育要領全面改訂において、これまでの６領域から５領域になった際にも、高杉らは「領域は活動の区分ではなく、幼児の発達を見取る窓口、あるいは視点である」と既に述べている[6]。幼保小連携推進事業での研修会に参加してみると、保育者は、小学校の国語科・算数科・生活科など教科学習の授業参観の際も、学習内容の理解や授業内容よりも、子どもの表情や言動などから内面の気持ちや保育者や友達との関わりに視点を当てて話したり、その話になると大きくうなずいたりすること等が比較的多い。これは、保育者が５つの領域を視点に普段から子どもを多面的に総合的に見取っていこうとはしているものの、無意識のうちに５つの領域のどれかに偏った視点で見取っているためではないだろうかと思われる。

⑷　研究の目的

高杉ら（1898）が領域は活動の区分ではないと述べているように、現行の幼稚園教育要領解説等においても、領域に関しては、独立した授業として展開される教科とは異なるため、領域別に教育課程を編成したり、特別な活動と結びつけて指導したり、などの取り扱いはしないようにと明記されている。そのため、保育の計画を立てる際に５つの領域が相互に関連を持ちながら総合的に指導されなければならないとも明記している[7]。しかしながら、この領域については、子どもの発達を見取る窓口でもあると言われているため、計画の段階では総合的に捉え、評価の段階では子どもを見取る時には５つの窓口からそれぞれ部分的に捉えていかなければならない。この領域の複雑な捉えが、保育者の子どもを見取る際の視点の偏りになっているのではないかと考える。

そこで、本研究では、異なる施設（幼稚園、保育所、認定こども園）の保育者が一堂に会しての研修会での活動案や話し合いの分析から、保育者は５つの領域のどこに視点を当てて幼児を見取ったり理解しようとしたりしているのか、その特徴について明らかにすることで、子どもを理解するという保育者の専門性の向上のための視座を得ることを目的とする。

２．対象と方法

⑴　研究の対象

本研究の対象となる保育者は、山形県内のＡ保育所２名、Ｂ保育所１名、Ｃ幼稚園１名、Ｄ幼稚園１名、Ｅ認定こども園２名、計５施設、７名である。この５施設

は、全て同じ町立の施設である。保育者の年齢は20代１名、30代４名、50代２名であり、50代の１名は管理職（所長代理）に就いている。調査は、2012年12月14日のＡ保育所を会場にした５施設合同研修会の話し合いで行った。この研修会は、保育者の資質向上を目的とし、2012年度は年間５回開催されており今回が第５回目となる。研修は、各施設の保育の課題を提示しながら順番で保育を公開し、他施設から１～２名の保育者が参観して、その後にその課題に沿った話し合いを行う形式をとっている。なお、話し合いの時間は約１時間20分である。また、この公立の５施設は人事交流がある。

⑵　調査の方法

本研究では、保育者が子どもを見取っていく際の視点の傾向について明らかにしようとしているため、保育者同士の普段の話し合いの分析が必要となってくる。筆者は指導助言という形でその合同研修会に全て参加しているが、調査日当日の研修会の話し合いには、観察者という立場で話し合いには文字による記録に徹して参加した。調査の目的や筆者自身の参加の姿勢については、あらかじめ対象者には伝えておらず、保育者同士の話し合い後に、その目的と話し合いの分析について理解と了承を頂き、調査協力を得ている。

⑶　分析の方法

話し合う内容は、公開保育を行う施設の課題に沿って行われるため、課題の内容はもちろんのこと、当日の保育活動案の内容とも関係すると考えられるため、まず、保育を公開する側の保育者の子どもを見取る視点について保育活動案における「子どもの姿」「ねらい」「援助・留意点」の項目について分析を行い、次に、合同研修会の保育参観後の話し合いでの調査対象者である７名の保育者が話す内容についての分析を行うこととする。分析の方法は、研修会が保育所にて開催されたため、表１に示した保育所保育指針における５つの領域の「内容」をもとに分類することとする。

表１　保育所保育指針における５つの領域の内容

心身の健康に関する領域「健康」の内容

①保育士等や友達との触れ合い、安定感をもって行動する
②いろいろな遊びの中で十分に体を動かす
③進んで戸外で遊ぶ
④様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む
⑤健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする
⑥身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする
⑦保育所における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って行動する
⑧自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う
⑨危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気をつけて行動する

人とのかかわりに関する領域「人間関係」の内容

①安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする
②保育者等や友達との安定した関係の中で、共に過ごすことの喜びを味わう
③自分で考え、自分で行動する
④自分できることは自分でする
⑤友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う

⑥自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く
⑦友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう
⑧友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見出し、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ
⑨良い事や悪いことがあることに気付き、考えながら行動する
⑩身近な友達との関わりを深めるとともに、異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ
⑪友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気づき、守ろうとする
⑫共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う
⑬高齢者を始め地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ
⑭外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ

身近な環境との関わりに関する領域「環境」の内容

①安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする
②好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ
③自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気づく
④生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ
⑤季節により自然や人間の生活に変化があることに気付く
⑥自然などの身近な事情に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする
⑦身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く
⑧身近な物を大切にする
⑨身近な物や道具に興味を持ってかかわり、考えたり試したりして工夫して遊ぶ
⑩日常生活の中で、数量や図形などに関心をもつ
⑪日常生活の中で、簡単な標識や文字などに関心をもつ
⑫近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する

言葉の獲得に関する領域「言葉」の内容

①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする
②保育士等と一緒にごっこ遊びなどをする中で、言葉のやりとりを楽しむ
③保育士等や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする
④したこと、見たこと、聞いたこと、味わったこと、感じたこと、考えたことを自分なりに言葉で表現する
⑤したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする
⑥人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す
⑦生活の中で必要な言葉が分かり、使う
⑧親しみを持って日常のあいさつをする
⑨生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く
⑩いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする
⑪絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう
⑫日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう

感性と表現に関する領域「表現」の内容

①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ
②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ
③生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気づいたり感じたりして楽しむ
④生活の中で、様々な出来事に触れて、イメージを豊かにする
⑤様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう
⑥感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたりつくったりなどする
⑦いろいろな素材や遊具に親しみ、工夫して遊ぶ
⑧音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう
⑨かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする
⑩自分のイメージを動きや言葉で表現したり、演じて楽しんだりする楽しさを味わう

３．結果と考察

⑴　保育活動案による保育者の子どもを見取る視点

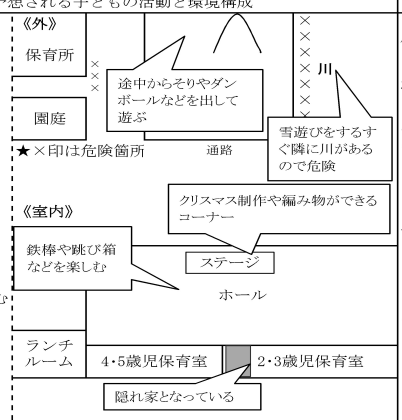
Ａ保育所の課題は「環境構成と遊びの広がり」であり、当日の保育活動案については、表２、表３に示す通りである。なお、Ａ保育所は、２歳児から５歳児までの18名という小規模保育所であるため、活動案は、４・５歳児と、２・３歳児に分けて作成されている。この活動案の「子どもの姿」「ねらい」「援助と留意点」の項目について５領域に分類したのが表４である。

表２　Ａ保育所の保育活動案（２・３歳児）

保育活動案　平成２４年１２月１４日（金）　○○組　２歳児（２名）　３歳児（３名）　担任　○○○○　○○○○

子どもの姿	発表会が終わり、大勢の前で発表できたことが自信につながり、５歳のすることに憧れを持ち、真似をするようになってきている。４歳児や５歳児と一緒に遊びたいという気持ちが強くなってきている。また、雪遊びをする前の身支度をするのは早いが、靴下にズボンを入れるなどの細かいことに対しては援助が必要である。	ねらい	２歳児：雪に触れながら、冬の寒さや冷たさを感じながら元気に遊ぶ。 ３歳児：雪遊びの身支度を知り、自分のことは自分でしようとする気持ちを持つ。

時間	予想される子どもの活動と環境構成	援助・留意点
8:30	○登所する ・身の回りの始末をする	・子どもたちが自らあそび出せるように必要な道具や材料を準備する。 ・遊びの中でトラブルが起きたときは、互いの意見を聞き、それぞれの気持ちを受け止め解決の方法を一緒に考えていく。
9:10	○片付け	・途中入所したＲ児は、まだ気持ちに不安定な所があるため、その都度見守りながら、声をかけ、友達と一緒に過ごせるようにしていく。
9:30	○雪遊びをする	＜雪遊び＞ ・楽しく雪遊びができるように、排泄・排便をしてから外に出すようにする。 ・遊ぶ前に危険箇所を子どもと一緒に確認して、楽しく遊べるようにする。 ・雪遊びが終わったら、室内が濡れないように、玄関先で上着についている雪や長靴の雪を落とすことを伝える。
10:30	○片付けて入室する ・好きな遊びを楽しむ	
11:20	○給食準備をする	



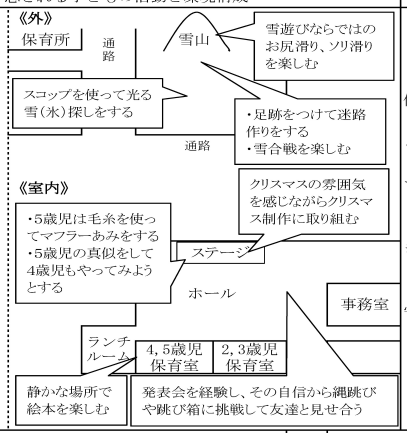
雨天時	登所後、好きな遊びをして、１０時２０分から集団遊びを行う。	考察	

表３　Ａ保育所の保育活動案（４・５歳児）

保育活動案　平成２４年１２月１４日（金）　○○組　４歳児（８名）　５歳児（５名）　担任　○○○○

子どもの姿	発表会を通して、共通の目的に向かって取り組んだことで、クラスのまとまりが一段と感じられ、誘い合いながら集団で遊ぶ姿が見られる。５歳児には達成感が感じられ、４歳児は５歳児の真似をしながら挑戦してできた喜びが自信となっているようなので、５歳児を中心に様々なことへの興味や活動意欲が高まってきている。	ねらい	４歳児：遊びが広がっていく楽しさや嬉しさを感じながら、友達と関わりを持ち活動する。 ５歳児：自分のやりたい遊びを伝えたり、友達のやりたいことを聞いたり、自分たちでルール作りをしながら遊びを進めていく

時間	予想される子どもの活動と環境構成	援助・留意点
8:30	○登所する ・身の回りの始末をして好きな遊びを楽しむ	・笑顔で子どもを迎え、挨拶や話をしながら健康観察をする ・身の回りの始末を終えてから好きな遊びをするように見守り、必要に応じて声がけをする
9:10	○片付け	・子どもたちが自ら遊び出せるように必要な道具や材料を準備する。
9:30	○雪遊びをする	・雪遊びの支度がしっかりできているか確認し、できないところはやり方を教えるようにする。 ・雪遊びの楽しさを十分に感じられるように、遊びを紹介して友達がやっている遊びを見て興味を持てるようにする。 ・ルールを守って安全に遊べるように目を配る。 ・物を大切に使い、使った物はみんなで最後まで片付けができるように声がけをする。
10:30	○片付けて入室する ・好きな遊びを楽しむ	・子どもたちが主体となって遊びを展開していけるように見守る。
11:20	○給食準備をする	・感染予防のため、手洗いうがいの励行を行う。



雨天時	登所後、好きな遊びをして、１０時２０分から子ども達と相談しながら集団遊びをする。	考察	

表４　Ａ保育所の保育活動案における保育者の視点

項目	年齢	文言	領域				
			健康	人間関係	環境	言葉	表現
子どもの姿	２・３歳児	５歳児のすることに憧れを持ち、真似をする		①⑩			
		４歳児や５歳児と一緒に遊びたいという気持ちが強く		①⑩			
		雪遊びをする前の身支度			⑤		
		靴下にズボンを入れるなどの細かいこと		④			
	４歳児	５歳児の真似をしながら挑戦してできた喜びが自信となっている		⑩			
	５歳児	共通の目的に向かって取り組む		⑧			
		クラスのまとまり		⑩			
		誘い合いながら集団で遊ぶ		⑦			
ねらい	２歳児	雪に触れながら、冬の寒さや冷たさを感じながら			③		①
		元気に遊ぶ	②③				
	３歳児	雪遊びの身支度を知り			⑤		
		自分のことは自分でしようとする気持ちを持つ		④			
	４歳児	遊びが広がっていく楽しさや嬉しさを感じながら	④				
		友達と関わりを持ち活動する		⑤			
	５歳児	自分のやりたい遊びを伝えたり、友達のやりたいことを聞いたり		⑥		⑤	
		自分たちでルール作りをしながら遊びを進めていく		⑪			
援助・留意点	２・３歳児	遊びの中でトラブルが起きたときは互いの意見を聞きそれぞれの気持ちを受け止め解決の方法を一緒に考えていく		③⑨		④	
		排泄・排便をしてから外に出すようにする	⑥				
		途中入所したＲ児はまだ気持ちに不安定な所があるため･･･声をかけ友達と一緒に過ごせるようにしていく	①	②⑦			
		遊ぶ前に危険箇所を子どもと一緒に確認して	⑨				
		玄関先で上着についている雪や長靴の雪を落とすことを伝える	⑦				
	４・５歳児	雪遊びの支度がしっかりできているか確認し、できないところはやり方を教えるようにする		④			
		雪遊びの楽しさを十分に感じられるように					
		遊びを紹介して友達がやっている遊びを見て興味を持てるようにする	④				
		ルールを守って安全に遊べるように	⑨	⑪			
		物を大切に使い、使った物はみんなで最後まで片付けができるように		⑫	⑧		
		感染予防のため、手洗いうがいの励行を行う	⑧				

※「領域」における番号は、表１に示す各領域の番号である

表４より、計画の段階においてＡ保育所の保育者は、課題が「環境構成と遊びの広がり」ではあるものの、子どもを見取る視点としては、領域「健康」や領域「人間関係」をより意識していると言える。領域「健康」については、活動計画が昼食前までの活動であるので、楽しんで食事をするという１項目を除けば、他の８項目が全て網羅されている。このことは、保育者が常に子どもの心身の健康を育むことを意識していることを裏付けている。また、領域「人間関係」については、領域の内容14項目中、高齢者との関わりと、外国人などの異なる文化を持った人々との関わりの２項目を除いた12項目について網羅されている。また、これまでの子どもの育ちを考察する「子どもの姿」については、ほとんどが領域「人間関係」を視点に記載されており、保育者は、子どもとの関係や子ども同士の関わりについて特に意識していると考えられる。これに対して、領域「環境」は12項目中３項目、領域「言葉」は12項目中２項目、領域「表現」は10項目中１項目である。領域「言葉」の２項目は、領域「人間関係」と重複するところがあり、言葉を用いて人と関わることを意識していると思われる。雪遊びがこの日の主な活動予定であったために、領域「環境」の自然環境との関わりや身近なものとの関わりに視点をあてている。しかし、雪遊びが主な活動ではあるものの、雪遊びに使用する道具との関わりや、試したり工夫したりして遊ぶことや数量や図形・標識や文字などへの関心といった知的好奇心に関係する内容については、あまり触れていない。また、冬の自然とかかわる際も五感を使っているはずであるが、子どもの感性や表現についてもあまり触れていない。このことに関しては、計画の段階では、５領域が相互に関連を持ちながら総合的に捉えられているため、５領域のそれぞれの細かな視点ではなく大まかな視点で捉えられていると考えられる。

⑵　保育者同士の話し合いでの子どもを見取る視点

話し合いは、はじめに保育を公開したＡ保育所の保育者からこの活動の「ねらい」を設けた経緯や、保育をしてみての振り返りが語られ、その後、参観した保育者から感想や質問が出されたり課題に関する意見交流がなされたりした。なお、話し合いに参加した保育者は表５に、話し合いの記録は表６に示す通りである。また、話し合いの記録を５領域の視点で分類したものが表７である。

表５　話し合いに参加した保育者

Ａ保育所	保育者Ａ１（20代後半）・保育者Ａ２（50代後半）
Ｂ保育所	保育者Ｂ（30代前半）
Ｃ幼稚園	保育者Ｃ（30代前半）
Ｄ幼稚園	保育者Ｄ（50代前半）
Ｅ認定こども園	保育者Ｅ１（30代後半）・保育者Ｅ２（30代前半）

表６　話し合いの記録（要約・抜粋）

01　保育者Ａ１：発表会があったことや、天候も悪かったこともあり、これまでほとんどホールで遊んでいたため、天候にも恵まれた今日は子どもたちからも「雪遊びがしたい」との声があり、思う存分遊ばせたいと思い、予定よりも早く雪遊びを行うことにした。雪遊びは今日で３回目である。

02　保育者Ａ１：私自身としては、あまり雪遊びの道具を出さない方向でいた。例えば、ソリを出さずにシートや段ボールなど、自分で考えて保育所内にいる職員に自分で借りに行くように促した。

03　保育者Ａ１：室内遊びが多かったので、戸外でそり遊びや雪だるま作りなどをしてのびのびと体を動かして欲しいと思っていたが、室内遊びでも静かな遊びを好む子は、ダイヤモンド探しごっこや宝探しごっこといったあまり動かない静的な遊びをしていた。そのような子には、思わず体を動かしたくなるような援助や環境の工夫が必要だと感じた。

04　保育者Ａ２：発表会前後は室内遊びが多く、体を動かす遊びをと思いかくれんぼをしたが、子どもが隠れる場所がないことに気づいた。そのこともあって、今回の課題（環境構成と遊びの広がり）を設けることにした。

05　保育者Ｅ１：発表会のなごりがあって、ホールのお祭りの飾りや大きな木のクリスマス飾りなど、見ているだけでワクワクして楽しそうな雰囲気が出ている。

06　保育者Ｅ１：今日の保育を参観していても、年齢の縦のつながりが自然と出来ていて、発表会での年長児へのあこがれの思いがあるからだと思った。また、何をしようかなと一人で遊んでいる子どももいなかった。

07　保育者Ｅ２：朝の時間の流れがゆっくりしていてよかった。子どもの数が少ないということもあってなのか、一人一人したい遊びがあり、年齢が上の子どもが下の子どもに教えている場面もあり、この姿は、日頃の縦のつながりがあるからだと感じた。これも、発表会という大きな行事を一つ終えたためではないかと思う。

08　保育者Ｅ２：すぐに外に出て遊べる環境なので、とても良いと感じた。

09　保育者Ｂ：朝から子どもたちの表情がとても良かった。４歳児は縄跳びが跳べなくてもしようとする姿が見られ、恥ずかしがらずに頑張っているという自信が伝わってきた。

10　保育者Ｂ：以前よりも子どもの人数が少なくなったが、家庭的な雰囲気で暖かさを感じる。

11　保育者Ａ２：発表会前の４歳児のＲ児は、５歳児に刺激されて台詞を覚えたことが自信となり、跳び箱や縄跳びに挑戦するようになり、できるものではなく、今はできないけれど頑張れば出来そうなことに取り組むようになった。

12　保育者Ａ２：３歳児が５歳児の発表した踊りにあこがれを持っていたらしく、見て覚えて踊って見せることがあったので驚いた。
13　保育者Ａ１：憧れを持たれている５歳児はまとまっているが、他の学年にもっと目が向くように（援助）している。
14　保育者Ａ１：人数が少ない分、一人に対する物が多くならないように配慮している。物をめぐってのいざこざも見られるようになっている。
15　保育者Ａ２：ホールにある“みんなを見守る木”は子どもたちと一緒に作り、少しずつ大きくなっていったものである。発表会の時に作った物を使ってお店屋さんごっこなどでもっと遊んでほしいと思うのだが、なかなか続かず、どう援助したらよいのか悩んでいる。
16　保育者Ｃ[注1)]：作品制作、特に、リリアンなどの編み物は、一つ一つ教えながら、子どもと一対一で作業制作していることが多いが、他の子どもが混ざってきた時にどのように援助したらよいか迷う時がある。
17　保育者Ａ１：４歳児は、友達との関わりやつながりを自分から求めるようにはなってきているが、技術を要することは５歳児と違って一人一人教えなければならない。その時は、保育者との一対一の関係を大事にしたいと思う。
18　保育者Ｄ：雪遊びをするために、あえて余り物を準備しない環境が良かった。子どもからの要求を待って、保育者が子どもとやりとりしながら雪遊びを面白くするためのダンボールやブルーシートの切れ端が出てくるといった保育者の意図的がよくわかった。
19　保育者Ｄ：５歳児の宝石屋さんごっこを中心に見ていたが、少し溶けてからまた固まった粒の粗い雪の塊を見たＸ児が「ここは宝の宝庫だよね」「〇〇伝説の宝石だ」「これで世界が変わるのだ」などと言葉を発していて、感性が豊かで、雪の塊からイメージを広げて友達と空想の世界を楽しんでいた。その言葉からＸ児の心のゆらぎを汲み取っていた。
20　保育者Ｄ：一緒に遊んでいた女児たちも、雪の塊の色や形に着目して、宝石の値段を決めていた。
21　保育者Ａ２：Ｘ児は、知的好奇心や豊かな感性は人一倍持ってはいるが、身の回りの始末や生活態度など、生活面に関して多くの課題があると捉えている。しかし、今日、Ｄ先生の話を聞いて、改めてＸ児の良さを知ることができた。
22　保育者Ａ１：Ｘ児は、知的な部分と生活面の部分とがアンバランスな子であるが、生活面の援助や指導を行ってく際も、イメージ豊かで、知識や言葉も豊富だという得意なところを生かして自信を持たせながら行うことが大事だと気付かされた。

表７より、保育を公開したＡ保育所のＡ１保育者とＡ２保育者は、保育活動案と同じように領域「健康」と領域「人間関係」を視点に子どもを見取り、保育を振り返っていることがわかる。事後の話し合いが、公開された保育を中心に進められているため、Ａ１保育者やＡ２保育者の意識や思いに沿って他の保育者たちも話を重ねている。特に、発表会後の研修会ということもあり、行事を通して一人一人の子どもの活動への意欲（領域「環境」）や、人とのかかわり（領域「人間関係」）についての育ちが著しく見られたため、それが話し合いの中心となっている。Ａ保育所は、小規模保育所ということもあり異年齢との関わりが意識されていて、このことが、今回は特に視点があてられている要因となっているのではないかと思われる（№６・№７・№13）。また、領域「環境」についても、自然や季節を踏まえた内容というよりも、物を介して、自分の気持ちを言葉で保育者や友達に伝えたりすることや、友達といざこざが生じた時にどのようにしたらよいのか子ども自身が考えたりすることなど、保育者の意

注１）保育者Ｃは途中席を外している。

識は、領域「環境」よりも領域「人間関係」に重きを置いている（№15・№16・№18）。領域「環境」に関しては、身近な物や遊ぶ物などを大切にするといった物に対する心情や取り扱いについてがほとんどで、試したり工夫したりして遊ぶことや、数量や図形・標識や文字などへの関心といった知的好奇心にかかわることに関して発言している保育者は少ない。

７名の保育者のうちＤ保育者だけが領域「環境」を視点に雪の性質や雪の塊の形などに着目して見取っている（№19）。また、子どもの感性豊かな言葉を拾ったり、雪のどのようなことに子どもが興味を示しているのか見取ったりしたのは同じＤ保育者だった（№20）。限られた時間での話し合いのため、最後に感想等を話す形になったＤ保育者は、これまでの話の内容と視点を変えようという意図があったのかもしれない。話し合いの最後に、Ｄ保育者のＸ児の見取り方に対して、Ａ保育所のＡ２保育者からは「知的好奇心や豊かな感性は人一倍持ってはいるが、生活面に関して多くの課題がある」（№21）との意見が出され、知的好奇心の旺盛さや感性の豊かさはあるものの、身の回りの始末や安定して生活するなどといった領域「健康」や、自分で出来ることは自分でするといった領域「人間関係」の視点から課題を抱えた気になる子どもとしてＸ児は意識されていることが理解できる。Ｄ保育者の見取りが出された後に、Ａ１保育者から「Ｘ児の（知的な部分での）得意な面を生かして自信を持たせながら生活面の援助や指導を行っていきたい」との発言があった。Ｄ保育者が、これまでと異なった領域「環境」や領域「言葉」を視点にＸ児を見取ったことにより、Ａ１保育者やＡ２保育者は、Ｘ児の課題についてこれまでとは異なった新たな方向や方法での援助や指導が必要なことに気づいたのではないかと思われる。このように、５つある領域から多面的に子どもを見取っていくことが、新たな子ども理解につながり、新たな援助の方向性を見出すきっかけともなっている。

表７　話し合いによる７名の保育者の子どもを見取る視点

記録ナンバー	保育者	文言	領域					その他
			健康	人間関係	環境	言葉	表現	
NO.01	A1	思う存分遊ばせたい	②③					
NO.02	A1	ソリを出さずにシートや段ボールなど、自分で考えて保育所内にいる職員に自分で借りに行くように促した		③④				
NO.03	A1	のびのびと体を動かして・思わず体を動かしたくなるような援助や環境の工夫	②					
NO.04	A2	子どもが隠れる場所がないことに気づいた						環境構成
NO.05	E1	見ているだけでワクワクして楽しそうな雰囲気						環境構成
NO.06	E1	年齢の縦のつながり・年長児へのあこがれ・一人で遊んでいる子どももいなかった		①⑩				
NO.07	E2	一人一人したい遊びがあり・日頃の縦のつながりがある	④	⑩				
NO.08	E2	すぐに外に出て遊べる環境						環境構成
NO.09	B	跳べなくてもしようとする姿が見られ、恥ずかしがらずに頑張っているという自信	①③					
NO.10	B	家庭的な雰囲気	①					環境構成
NO.11	A2	今はできないけれど頑張れば出来そうなことに取り組む		②④				
NO.12	A2	あこがれを持って・見て覚えて踊って見せる		②⑩				
NO.13	A1	他の学年にもっと目が向くように		⑩				
NO.14	A1	一人に対する物・物をめぐってのいざこざ		⑥⑨⑪				
NO.15	A2	発表会の時に作った物を使って			②⑧			
NO.16	C	一対一で作業制作・他の子どもが混ざってきた時にどのように援助したらよいか迷う	①	②	⑨			
NO.17	A1	保育者との一対一の関係	①	②				
NO.18	D	子どもからの要求を待って・雪遊びを面白くするためのダンボールやブルーシートの切れ端が出てくる			⑨	⑤		
NO.19	D	イメージを広げて友達と空想の世界を楽しんでいた・言葉からＸ児の心のゆらぎを汲み取っていた		⑦		⑩	③	
NO.20	D	雪の塊の色や形に着目して			⑩		④⑤	
NO.21	A2	身の回りの始末や生活態度など、生活面に関して多くの課題がある	⑥					
NO.22	A1	知的な部分と生活面の部分とがアンバランス・イメージ豊かで、知識や言葉も豊富だという得意なところを生かして自信を持たせながら	⑥			⑩	④	

４．総合考察と課題

本研究は、保育者が、子どもを見取ったり、理解しようとしたりする際の視点の持ち方とその特徴について、保育における５領域をもとに明らかにし、子どもを理解するという保育者の専門性向上のための視座を見出すことを目指したものである。

⑴　保育者の子どもを見取る視点の傾向

本研究での保育活動案の分析から分かるように、保育者は、５領域の中の領域「健康」と領域「人間関係」に特に視点をあてて保育を計画するという傾向がある。また、その計画に沿って実践して評価しているわけなので、事後の話し合いにおいても同じ様に、領域「健康」と領域「人間関係」に特に視点をあてて子どもを見取る傾向がある。幼児期の教育が人格の形成の基礎を培うと言われていることからも、子どもの心と体の健康、子どもと保育者との愛着関係・信頼関係の確立、子どもの自我の芽生え、周囲の友達との関係といったことに保育者の意識が向いているのだろう。特に、話し合いにおいては、領域「健康」での「①保育士等や友達との触れ合い、安定感をもって行動する」ことや、領域「人間関係」での「②保育者等や友達との安定した関係の中で、共に過ごすことの喜びを味わう」に視点があたっていることが多い。これは、話し合いでのＸ児の事例からも分かるように、感性が豊かであったり、知的好奇心が旺盛であったりすることよりも、人との関わりにおいて信頼関係を築き、その中で心落ち着かせて生活するといった安定感が幼児期の生活では大事であると保育者は認識し、意識しているからであろう。

⑵　保育者が多様な視点を持つために

保育者は、５つの領域を窓口に多面的、意識的に子どもを見取っていくことが大切である。しかし、上記にもあるように、保育者の子どもを捉える視点の傾向に偏りが見られ、保育者一人一人についても子どもを見取る視点の傾向に偏りがある。その偏りを打破するためには、今回の話し合いのように、同じ施設内の保育者同士での話し合いだけではなく、これまでの先入観を取り払って違った視点で子どもを見取ることが必要となる。それ故に、他の施設の保育者など様々な他者との意見交流が大切となってくる。また、Ｘ児をめぐってＡ１保育者やＡ２保育者が、Ｄ保育者の見取りをヒントに、新たなＸ児への援助の方向性を見出したことから、他者の意見に耳を傾ける謙虚な姿勢も大切であろう。そして、何よりも重要なのは、その意見交流の際に、保育者自身が、自分の子どもを見取る際の視点の持ち方の傾向に気づいたり認識したりすることであると考える。

⑶　本研究の課題

本研究での調査は、保育者の作成した１施設の保育活動案と、１時間20分の話し合いの記録であった。今回の保育活動案は計画の大まかな計画であるため、保育者の計画段階での細かな視点が十分に分析できなかったことから、調査方法や分析方法を検討する必要がある。また、調査対象となった７名の保育者の５つの施設ごとの保育活動案（保育の計画）の分析や、複数回の話し合いの分析によって、より細やかな保育者の子どもを見取る視点の特徴や傾向を明らかにすることも必要である。更には、話し合いだけではなく、保育の記録からの分析も必要であろう。そのため、今後は、様々な角度から細やかに保育者の子どもを見取る視点について分析を行っていきたい。

【引用文献】

[1] 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』pp.230－233　フレーベル館
厚生労働省（2008）『保育所保育指針解説書』pp.143－146　フレーベル館
[2] 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領』p.28、p.81、p.86　東京書籍
[3] 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力会議(2011)
幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のありかたについて（報告）
[4] 山形県教育庁義務教育課（2010）　幼保小連携スタートプログラム　～「遊び」から「学び」へ　共に育む自主性と思いやり～
[5] 安藤節子（2009）『森上史朗・大豆生田啓友編　よくわかる保育原理』　p.91　ミネルヴァ書房
[6] 高杉自子・野村睦子（1989）『新・幼稚園教育要領を読みとるために』p.64　ひかりのくに出版社
[7] 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』p.67　フレーベル館

謝辞

本論文の調査にご協力くださいましたＡ保育所はじめ、５施設の７名の保育者の皆様に心から感謝申し上げます。